

原発 そこが問題だ

第13号

2022年8月7日

原発反対の会・吹田
wasser861.a@pure.zaq.jp

核発電(原発)は多くの事故を起こし、 解決できない多くの問題を抱えたままです

スリーマイル島原発(1979年、レベル5)、チヨルノービリ原発(1986年、レベル7)、福島第1原発(2011年、レベル7)の過酷事故だけでなく、多くの事故を起こし命を奪ってきました。日本での主な事故は下記の通りです。

①1995年12月：動燃・高速増殖炉(もんじゅ)のナトリウム漏えい・火災事故(レベル1)。この事故で、安全のチェック体制も含めて原子力開発全般の信頼性を失墜させました。核燃料サイクル技術の困難さを一般の人が知るようにもなりました。しかし高速増殖炉から生成するプルトニウムは高濃度で原爆の材料になるのを大きな理由に、3.11の後まで(2016年)開発をやめませんでした。

②1997年3月：動燃・アスファルト固化施設火災、爆発事故(レベル3)。低レベル放射性廃棄物(再処理の場合の低レベルは原発の場合とは異なり、極めて強い放射能を含む)の固化のためのアスファルトが火災・爆発。普通の化学工場でも爆発事故は時折発生しますが、それに比して放射能を扱うという条件が加わり、困難性は飛躍的に高まります。

③1999年6月：北陸電力・志賀原発炉内圧力上昇、制御棒2本抜け、臨界15分間の事故(レベル3)。

④1999年9月：JCO(核燃料加工施設)では核分裂が持続的に起こる臨界事故。日本で初めて起こり、2人の労働者が原爆にうたれたような無残な姿で死亡。根本原因は臨界が起こらないように各容器を「形状管理」していなかった原子力産業と国(原子力安全委員会)の責任でしたが、命を奪われた労働者の責任(バケツを使った)にされました。福島第1原発事故以外では、最悪レベルの事故でした(レベル4〔当初スリーマイル事故と同じレベル5と判定〕)。

⑤2004年8月：関西電力美浜発電所2次冷却系配管損傷、水蒸気が噴出し労働者4名が死亡。商用原発では最初の死者発生事故(レベル0)

⑥2007年7月：中越沖地震で東電柏崎刈羽原発事故(7基ある世界1の原発)

集積地)。M6.8の中地震にもかかわらず震度7(322~680ガル、設計時の最大3.6倍)でした。つまり地震や地盤に対する設計が甘く、2004年から2008年にM6.8以上の地震は7回あったが、宮城県沖地震(M7.2)での女川原発の263ガルが最高で、柏崎刈羽原発の地震動がいかに大きかったかが分かります。その大きな要因として、事故後判明した海底活断層隠ぺい、軟弱地盤があります。結果、放射能が大気中、海中へ流出、油冷式変圧器火災(化学消防車なし)。東電は「想定外」を繰り返し、反省も総括もなく、強引に「科学者」の支援もえてわずか2年後に2基を再稼働、さらに3.11直前の2月までに2基を再稼働、驚くべきことです。

そして3.11でも「想定外」を繰り返し、被災者を苦しめ、それでもなお、東電はテロ対策をやらずにドル箱・柏崎刈羽原発の再稼働にしがみついているのです。たら-ればはありえませんが、東電・国が柏崎刈羽原発の教訓を福島第1原発に生かしていれば、事故被害はゼロでなくても小さくなっていたと思います。

- ・レベル数は「国際原子力・放射線事象評価尺度(INES)」で原子力関連の事故や故障の大きさを評価するものです。したがってレベル数で事故全体の評価が決定するとは限りません。

- ・他にも事故はたくさんありますが、レベル数、犠牲者数、安全対策問題を勘案して取り上げました。

- ・「核燃料サイクル」について(①, ②, ④はこれに関係する)

原子力発電は「原子炉という容器で核燃料を燃やして(核分裂させて)エネルギーを取り出します。火力発電が「火力発電炉で石炭など化石燃料を燃やす」と原理的に同じです。しかし、核燃料サイクルといわれるこの核燃料(労働対象)の流れ(燃料製造から燃料再処理、廃棄物処理)が、原発(労働手段)とともに重要な構成要素であり、問題を抱えています。一言でいえば放射能を閉じ込めることがほとんど無理だからです。そのため④では「裸の原子炉」による核分裂が街中で起こりました。

- ・なお、事故ではありませんが、とくに1990年代後半から東電をはじめ、隠ぺい・改ざん・ねつ造などトラブル隠しが頻発し、なかでも2002年8月、東電の29件の重大なトラブル隠しがGEの子会社のアメリカ人元技術者の内部告発で明らかになり、首脳陣が辞職しました。その時社長になったのが勝俣恒久氏(柏崎刈羽原発事故時でも社長、3.11時の会長)であり、ほぼ10年間東電に君臨したことは興味深いことです。1990年代後半から福島第1原発過酷事故への道をまっしぐらに進んだといっても過言ではないでしょう。

- ・以上は「原子力安全神話」の現実の姿を示すものでもあると思います。

[高木仁三郎さん、吉岡斉さん、小出裕章さん、山本義隆さんなどの著書から多くを学びました。]